

大東アーカイブス第三回企画展

「シンボル誕生」～校歌・学生歌・校章～

展示期間：平成19年4月2日（月）～9月25日（火）

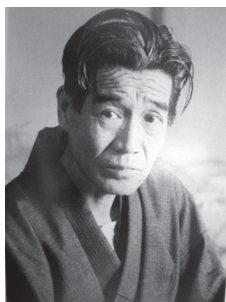
（開室時間 毎週月～金曜日 9:30～16:30）

展示場所：板橋校舎2号館1階 大東文化歴史資料館展示室

今回の企画展では、学びの窓を同じくする「大東生」にとって忘れることのできない「校歌・学生歌・校章」をテーマとしました。

大東文化学院時代から現在まで、大東文化大学、第一高等学校、青桐幼稚園、大東医学技術専門学校に学ぶ「大東生」は、それぞれ建学の精神を歌に託して校歌・学生歌を歌い継ぎ、シンボルとして校章を帽子や制服などに身につけてきました。校歌・学生歌・校章は、在校生と卒業生とが「大東文化」への思いを等しく共有するための大切な役割を果たしてきたのです。

今回の「シンボル誕生」では、多くの方々からご寄贈いただいた大東ゆかりの制服・学帽・襟章などを展示しているほか、校歌・学生歌の誕生経緯などを紹介しています。



谷鼎（校歌作詞者）とその著作について

現在の校歌は、旧校歌（学院歌）に代わり、1953（昭和28）年に制定されたもので、作詞者は本学で教鞭を執る傍ら、歌人・窪田空穂に師事して歌人としても活躍した谷鼎（たに・かなえ 1896～1960年）である。谷の著作は、今回展示している『岩波講座日本文学 藤原定家』（1931年）や『古今和歌集評解』（有精堂、1955年）をはじめとする古典文学研究書と歌集に大別される。展示された書籍を目の前に見ると、谷が当時の教授会から校歌の作詞を委嘱されたこともよく理解できる。谷は在職中の1960（昭和35）年、突然の輪禍のため急逝したが、この年に作られた「通勤」と題する連作短歌の中には、本学を歌った次のような1首がある。

学生らすでに待ちおり教卓に位置たしかめて先づおく靴

（歌集『松籟』〔近代詩歌社、1963年〕所収）

なお、谷鼎の出身地である神奈川県秦野市の市立図書館には、その生涯にわたっての業績を著作や遺品から紹介する「谷鼎コーナー」が設けられていることも付言しておきたい。

（英米文学科専任講師・歴史資料館運営委員会委員 宮瀧交二）

「学生歌」と児玉花外

大東文化学院（大東文化大学前身校）の学生歌を作詞したのは、児玉花外（1874～1943年）である。花外は、「白雲なびく駿河台…」ではじまる明治大学校歌の作詞者としても知られている人物であり、明治から昭和初期にかけて活躍した社会主義詩人グループの一人として数えられている。

本学の学生歌を作詞した正確な時期は不詳であるが、おそらく昭和初期の1930（昭和5）年前後のことであつたと思われる。初期の花外の作品は、キリスト教社会主義の立場から権力への反抗や貧富の差への憤りをテーマとしていたため、その詩歌集は政府によって発禁処分を受けるなど、不遇の時代を長く送らねばならなかった。そのような中で、神楽坂の粗末な下宿に身を寄せていた花外は、当時九段にあった大東文化学院の教員や学生らと交流を持つようになった。大東文化学院の学生と何度も酒を酌み交わす中で、彼らの情熱に動かされ、大東文化学院の学生歌が生まれたという。

なお、花外は1925（大正15）年～1930（昭和5）年の間、数回にわたり雑誌『大東文化』にも詩歌を発表している。同時期は花外にとって詩作数の激減期にあたるため、貴重な発表作品と言える。

（大東文化歴史資料館 浅沼薫奈）

